

十時頃まで、ラブレターの原稿を書く。

以下、そのラブレターの練習原稿。

「まだ名も知らないあなたへのラブレター」の練習をする。

これを書いた目的は、君との交際を申し込む為です。今の僕にとつて、それ以外、なにもすることは出来ません。君の名前さえ知らない僕が、君の性質、知的能力など知っているはずはありません。ただ、たびたび見かけ、「きれいな人だなあ。」といつも思いながら見ているうちになにか気になり、日が立つにつれ、いつの間にか君が好きになつてしまつたのです。僕は君が大好きです。と、言つてもそれは単なる本能的、感情的なものであつて、それ以上の何物でもなく、取るに足りない、つまらぬものの様に感じられます。僕は何度その為にとめらつたかわかりません。まず、君を好きになつた事自体、「つまらん、動物的な、バカげた事だ。何も考えずに、ただ、幻想にふけ、不要な事に大事な時間、労力を費やし、バカになるとは。」本当にその通りだと思ひ、理屈では簡単には割り切れない感情に対して大きく抵抗するのですが。僕はその為何週間も、何ヶ月も、ただ、君に会おうと一心でした。しかし、君が近くにゐると反対に君から離れようとする力が働き、全くへんてこな気持ちにとれわれ、陰に隠れて、君の姿を見ようとするのです。たまたま君が目の前にいたつて、もちろん知らぬ顔。何日も君に会わない時もありました。僕は君が好きでも何一つ君に対してする事は出来ません。君は僕とはなんの関係もない赤の他人です。話す機会もなく、ただ君の姿を見るだけ。このままなら、僕の片思いに終わる

頭に浮かべながら眠る